平成１９年(昭和８２年)２月１３日（火）

東海の古代

第　８０号　編集・発行　古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川 1-729
ホームページ：（「古田史学」で検索しても見つかります）
http://geocities.jp/furutashigaku-tokai
メール: frttokai@zm.commufa.jp
電話/FAX(カラー可) 052(936)5012
郵便振替 00870-5-30752

今月は古田先生が南米エクアドルへ出かけられます。魏志倭人伝の裸国・黒歯国を調査するためです。東海からは竹内さんも参加します。とにかく日本から遠いところです。そして治安面も不安です。それで竹内さんには古田先生の杖になってもらい、必要ならおんぶしてでも、無事に日本へ連れ帰ってくれるようお願いしておきました。

九州王朝の戸制の謎

古田史学ではおなじみの隋書倭国伝に不可解な一節がありました。

軍尼、一百二十人有り。猶中国の牧宰のごとし。八十戸に、一伊尼翼を置く。今の里長の如きなり。十伊尼翼、一軍尼に属す。

「伊尼翼」は一語ではなく「伊尼」と「翼（補佐役）」であることは東海の会の中では了承されたようです。「軍尼」という表記は軍制との関わりを感じさせます。問題は「八十戸」です。律令制度では五十戸で一里のはずです。九州王朝は独自の社会構造を持っていたように思われます。以下の記事は手がかりにならないでしょうか。

是歳、皇太子・嶋大臣、共に議りて、天皇記及び國記、臣連伴造國造百八十部并て公民等の本記を録す。（推古紀二十八年）

是に由りて、軽皇子、固辞ぶること得ずして、壇に升りて即祚す。……百官の、臣・連・國造・伴造・百八十部、羅列りて匝りて拝みたてまつる。（孝徳即位前紀）

是歳、蘇我大臣蝦夷、己が祖廟を葛城の高宮に立てて、八佾の儛をす。…又盡に國擧る民并て百八十部曲を發して、預め雙墓を今来に造る。（皇極紀元年）

「百八十」はいかにも半端な数です。実は百・八十部（ヤソベ）ではないでしょうか。百は多いという意味で実数ではありません。古事記の次の記事も見直す必要があります。

是に天皇、天の下の氏氏名名の人等の氏姓の忤ひ過てるを愁ひたまひて、味白檮の言八十禍津日の前に、玖訶瓮を居ゑて（語注略）天の下の八十友緒の氏姓を定め賜ひき。（允恭記）

ここにも八十（やそ）が登場します。一方、血縁的集団を表すようにもみえます。

吾已に過てり。今より以往は吾が子孫の八十連属に、恒に汝の俳人と為らむ。一に云はく狗人といふ。請ふ、哀びたまへ（神代紀山幸彦説話）

血縁の広がりをヤソと表現しているのではないでしょうか。

天皇、彼の菟田の高倉山の巓に陟りて、域の中を瞻望りたまふ。時に、國見丘のうえに則ち八十梟帥（語注略）有り…時に、弟猾又奏して曰さく、「倭國の磯城邑に、磯城の八十梟帥有り。又高尾張邑（語注略）に、赤銅の八十梟帥有り。此の類皆天皇と距き戦はむとす。…冬十月…先ず八十梟帥を國見丘に撃ちて、破り斬りつ。十有一月…吾が兄兄磯城、天神の子来でますと聞りて、則ち八十梟帥を聚めて、兵甲を具へて、與に決戦はむとす。…（神武即位前紀戊午年九月）

神武の戦いの相手は「八十梟帥」でした。これは本当に大和地方の話なのでしょうか。私には九州王朝の記録が混入しているように思われます。

是に、天皇、群卿に詔して曰はく「朕聞く、襲國に厚鹿文・迮鹿文といふ者有り。是の両人は熊襲の渠帥なり。衆類甚多なり。是を熊襲の八十梟帥と謂ふ。其の鋒當るべからず。…（景行紀十二年十二月）

神武紀と景行紀には似た表現が頻出しています。こうして征服された九州の民衆がそのまま八十戸毎に王朝の制度として吸収されていったように思われます。かつての田舎では全村皆親戚というのも珍しくありませんでした。「八十梟帥」の末裔が「軍尼」「伊尼翼」かも知れない、いかがでしょうか。

３月例会に参加を

日程：３月１１日(日)午後１時半～５時

場所：名古屋市市政資料館第１集会室(２階)

名古屋市東区白壁１の３(名古屋拘置所南)
地下鉄名城線「市役所」下車、東へ徒歩８分
名鉄瀬戸線「東大手」下車、南へ徒歩５分
市バス「市政資料館南」下車、北へ徒歩５分
〃　「清水口」下車、南西へ徒歩８分
〃　「市役所」下車、東へ徒歩８分
一応、駐車場有(無料)１２台収容
南隣にウィルあいち(愛知県女性総合センター)／地下駐車場３０分１７０円

参加費：500 円(維持会員は無料)

今後の予定

４月例会：４月８日(日)
５月例会：５月１３日(日)

例会は原則として毎月第２日曜日です。会場により開始・終了時刻も変わります。よく確認してからお出かけください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。

例会の場での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合はなるべく１６部用意願います。

カササギの証言

六年の夏四月に、難波吉士磐金、新羅より至りて、鵲(かささぎ)二隻を献る。乃ち難波(なにはのもり)社に養はしむ。因りて枝に巣ひて産めり。（推古紀）

１月に大阪で行われた古田先生の講演会の後、場所を移して懇親会がありましたが、たまたま森之宮神社の近くでした。この神社はその起源を、上記のように日本書紀にも記載されている由緒あるところです。

カササギは古代日本にはいなかったとされる鳥です。珍しいから飼うことにしたということでしょうが、これが変なのです。朝鮮半島など大陸ではカササギは大量に生息していました。朝鮮や中国の人にとって、カササギがいて当たり前。ところが倭国にはいない。だからこそ魏志倭人伝に「鵲無し」と特記されたのでしょう。

磐金の行為は、カラスを推古に「献上」したのも同様なのです。

朝鮮諸国と交流を密にしていたならば、磐金から馬鹿にされたと思うはずです。この記事は推古にもその家臣にも、朝鮮ははるかに遠い地だったという証拠です。

新羅、上臣大阿飡金春秋等を遣して、博士小徳高向黒麻呂･小山中冨連押熊を送りて、来りて孔雀(くじゃく)一隻･鸚鵡(おうむ)一隻を献る。（孝徳紀大化三年是歳条）

これでこそ大陸みやげというものです。同じ王朝の出来事とは思われません。

新刊紹介

シリーズ・人と文化の探究②

太田覚眠と日露交流

――ロシアに道を求めた仏教者

松本郁子著。ミネルヴァ書房発行。６千円＋税。著者の松本さんは京都大学大学院の若き学究。古田史学の実証主義的な学問の方法を現代史に生かそうとする意欲的な書です。

太田覚眠は四日市の法泉寺に生まれた浄土真宗の僧侶。明治３７年、日露開戦に際しウラジオストックにいた彼は、シベリアに取り残された居留民(多くは娼婦)を救うため単身行動し彼ら(彼女ら)八百人を引き連れ無事日本へ生還しました。これを契機に彼は宗教的立場から民衆を救うことに目覚めました。覚眠の一生を追いながら日本思想史の課題として日露交流史を専門とする決意を固めた松本さんの渾身の書です。若い才能のほとばしる本ですから難解な部分もありますが(「コンプレックス・ラグ」など)、巻末の資料編だけでも太田覚眠の人間像を得られる画期的な書物です。

値段が高すぎると思われる方はぜひ最寄の図書館にこの本が置かれるよう運動してください。